



「綾(あや)がき」と呼ばれる手  
順書は楽譜のようなもの。一筋、  
一筋の糸が交響曲を奏でるよう



## 伊賀くみひも



# 流れるような手さばき 後継者の育成は個々の問題

拡大にはつながらなかったという。  
「商売にならなければ成り手はなく、継承は難しい」と語るのは、「三重県組紐協同組合 伊賀くみひも伝統工芸士会」の増井明会長(69)。31歳の時に会社勤めを辞めて家業を継いだ3代目だ。失敗を繰り返して必死に技術を習得し、93年11月に伝統工芸士に認定された。  
増井さんは、さうりひも作りは衰退した。1902年、東京から江戸組ひもの技術を習得した広沢徳三郎氏が、同県上野市に糸組工場を設立、帯締めなどを製造して伊賀くみひもはよみがえった。時代が和装から洋装へ変わると、再び需要が減った。高度経済成長期の機械化、より安い工賃の中国で作られるようになるなど、「組子」と呼ばれる下請け職人が激減した。76年に産産相より伝統的工芸品の指定を受けて、後継者育成事業や販売促進事業を行ったが、後継者の増加と需要の

色鮮やかに染まった幾本もの糸が、職人の流れるような手さばきで1本の美しい帯締めへと組み上げられていく。  
三重県伊賀市特産の「伊賀くみひも」は、絹糸を複雑に組んで作った芸術性の高いひもだ。丈夫で伸縮性に富

「現在、伊賀くみひもは、増井さんを含めて15人が認定されている。」

「技 伝承」の写真は、名古屋駅前前のミッドランドスクエア地下1階エントランスの展示スペースで今月中旬から公開します。